

公開シンポジウム

最近の遍路・巡礼研究の動向と特徴 Recent Trends and Characteristics of Research on Pilgrimages

埼玉県立大学講師 浅川 泰宏
Asakawa Yasuhiro

From the 1990s into the next decade, the culture of traditional pilgrimages, such as the Shikoku Pilgrimage and Santiago de Compostela, has experienced a remarkable rebirth. As if in response to this, in recent years research on pilgrimages has shown an upsurge in various academic fields.

The purpose of this paper is, while touching upon this sort of historical background, to indicate the trends and characteristics of research on pilgrimages in recent years.

First, let us look at developments in pilgrimage research in the field of religious studies. A survey of papers and summaries of research presentations in *Shūkyō Kenkyū* (Religious Studies), the journal of the Japanese Association for Religious Studies, shows that, in general, research on pilgrimages appeared in the 1950s, came into full swing in the 1970s, began to diversify in the 1980s, and increased greatly from 1990 and particularly from 2005.

Next, I will introduce the history of research on the Shikoku Pilgrimage, the pilgrimage that at present is receiving the greatest attention both academically and in society, especially pre-World War II research that has received little mention until now. I will also present four topics for future study.

In addition, I will review the trends and characteristics of pilgrimage research in the areas of religious studies, folklore studies, and cultural anthropology in the last three years. These generally fall into four new categories of (a) tourism/cultural heritage, (b) memorials to the deceased/nationalism, (c) popular culture (anime), and (d) social welfare/volunteerism.

Finally, as topics for future study in pilgrimage research that can be anticipated from this work, I will suggest 1) creation/re-creation of sacred places, 2) theories of pilgrimage experience, and 3) pilgrimage resource theory.

I はじめに

1990年代から2000年代にかけて、四国遍路や熊野古道、あるいは欧州のサンチャゴ・デ・コンポステラなど、伝統的な巡礼文化の再生が顕著である。これに呼応するように、ここ数年、巡礼研究はさまざまな学問分野で盛り上がりを見せるようになった。

本稿の目的は、このような時代背景を踏まえながら、近年の巡礼・遍路研究の動向と特徴を示すことである。まず、巡礼研究の中心的担い手のひとつである宗教学を事例に、これまでの巡礼研究の展開を概観する。ついで、近年、社会的にも学問的にも最も注目を集める巡礼である四国遍路の研究史を整理する。その上で、最近3年間の宗教学、民俗学、文化人類学とその関連学会における巡礼研究をレビューする¹。最後に、これらの作業から想定される巡礼研究の今後の問題系を示すことを試みたい。

II 宗教学における巡礼研究の展開

巡礼は、少なくとも第一義的には、聖地を巡る宗教的実践として理解されてきた。そこで、宗教学における巡礼研究の展開を概観してみたい。日本宗教学会の機関誌『宗教研究』の創刊号から2008年11月現在の最新号である357号までを通読し、同誌に掲載された論文および学術大会の研究発表要旨²から巡礼をテーマとした研究をリストにまとめた(資料1)。

(1) 1950年代—巡礼研究の登場・パイオニアとしての小池長之

まず、初期の日本宗教学会においては、巡礼研究が全くみられないことを指摘すべきであろう。日本宗教学会は1930(昭和5)年の設立であるが、実にその後20年にわたって巡礼研究は皆無である。このことは、当時の宗教学において巡礼がマイナーな研究分野であったことを如実に表している。

同学会で巡礼を初めて取り上げたのは、1950年の第9回学術大会における小池長之の学会発表である。小池は、巡礼者は何を信仰しているのかという問い合わせをたて、その実践が複合的で多岐にわたることから、仏教型、神道型などと明確に分類できない「民間信仰(folk-beliefs)」の一形態として巡礼を位置づけた。

宗教学には宗教教団を研究対象とする傾向が伝統的にある。そんな中で、小池は「民間信仰」という概念を通して、研究対象としての巡礼を発見したのである。小池の研究には、四国遍路、秩父巡礼、西国巡礼など日本の主要な巡礼が取り上げられている。深く掘り下げる議論とは言えないが、今日においても興味深い着眼点や課題が既に提示されている[小池 1959]。そのような意味で、小池は宗教学における巡礼研究のパイオニアということができよう。

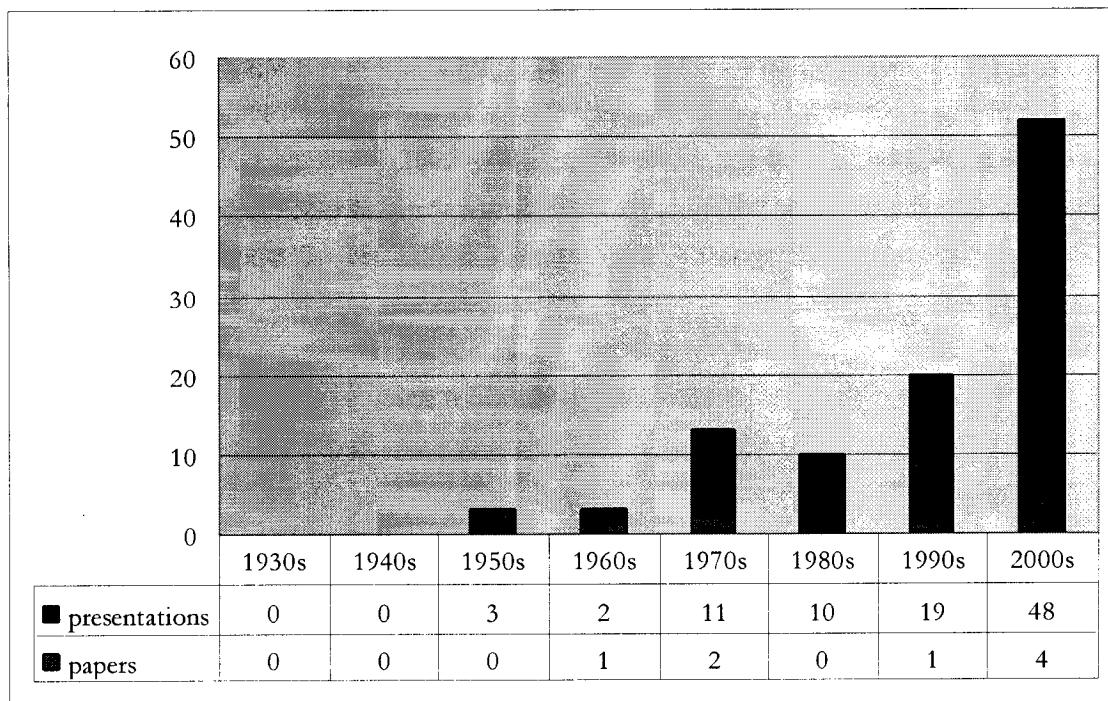


図1 『宗教研究』にみる巡礼研究の論文数・研究発表数の推移

(2) 1970年代—コミュニケーション論の受容による活性化

だが50年代60年代を通して、宗教学的巡礼研究は低調であった。1963年には巡礼をテーマとした論文が初めて『宗教研究』に掲載されたが、著者の新城常三は歴史学者である。だが1970年代に入ると、宗教学的巡礼研究は活況を呈するようになってくる。

高橋涉は、宮城県北部の弥勒寺における「おみろく参り」の事例研究から出発し、理論研究へ発展させ

た。巡礼の動機を呪術宗教的なものと捉え、自發的で私的な行為である巡礼は組織性や持続的な社会関係を否定するという特徴があることを指摘した[高橋1978, 1979]。

星野英紀は、巡礼をテーマとした論文を宗教学者として『宗教学研究』に初めて掲載した。彼は四国遍路に焦点を定め、巡礼者や接待者の内面に解釈学的に迫る研究を行った。他方で、巡礼の類型化論や比較研究を試みるなど、ミクロとマクロ双方の視点から日本の巡礼研究を大きく発展させた[星野 2001]。特に前者については、彼の師であるV.ターナーのコミュニタス論を、巡礼者のライフヒストリーへ適用したものと考えられる。

ターナーは儀礼論から巡礼研究を発展させた文化人類学者である。その巡礼研究の核心は、コミュニタス(*communitas*)と彼が名づけた状態—儀礼過程における境界状態で起こりうる、構造が融解した平等的・実存的な人間関係の有り様一が、巡礼には顕著に観察出来るという点にある[ターナー 1981(1974)]。彼の理論は1970年代から1980年代にかけて日本に紹介され、大きなインパクトを与えた。文化人類学においても、青木保や黒田悦子らがターナーを踏まえた巡礼研究を行っている[青木 1985][黒田 1988]。

(3) 1980年代～2000年代—多様化から爆発的な増加へ

その後、1980年代には様々な巡礼を対象とした研究発表が相次いだ。多様化の時代といえる。そして1990年代から2000年代前半期にかけて巡礼研究は急増する。なかでも、関一敏の研究[関 1993]を嚆矢とし、寺戸淳子や藤原久仁子によって展開させられてきた近現代ヨーロッパにおけるマリア出現の聖地研究の蓄積が特筆される。

そして2000年代には、巡礼研究は宗教学における重要な研究課題としての位置づけを確立したといえよう。特に最近3年間(2006年～2008年)の学術大会では、巡礼に関する研究発表が実に35本を数える。寺戸、藤原の研究は博士論文へと結実し、大著がそれぞれ刊行されている[寺戸 2006][藤原 2004]。また星野や筆者も、四国遍路を題材にした博士論文を公刊した[星野 2001][浅川 2008]。年平均10本以上という、近年の宗教学会における巡礼研究の動向は、爆発的な増加といって差し支えないだろう。これらが、いずれ論文や著書につながっていくことを考えるならば、巡礼研究は今後、ますます厚みを増し、大きく発展することが期待される。

III 四国遍路の研究史

(1) 戦後期の四国遍路研究

小池長之は、日本宗教学会で初の巡礼に関する研究報告を行った翌1951年に「四国遍路をめぐる信仰」と題する報告を行っている。これが、日本宗教学会で初めて「遍路」を冠した研究発表である。

その後、巡礼研究の全体的な動向と呼応するように、1960年代中頃から1980年代にかけて、四国遍路に関する主要研究が出揃うことになった。[前田 1971][真野 1980][武田 1969][星野 1981][新城 1982]などである。いずれも、今日でも先行研究として頻繁に引用される、いわば「古典」としての重みを持つ研究がこの時期に刊行されたことは特筆すべきことである。

さらに1990年代から2000年代には、大学などによるプロジェクト研究や、外国人研究者、新世代の研究者が加わるようになった。四国遍路研究の担い手は多様化し、学問的成果の蓄積は加速度的になっている。

(2) 戦前期の四国遍路研究

一方、戦前期の四国遍路研究については、あまり注目されてこなかった。これらは概ね(あ)仏教学・密

教学、(い)郷土史、(う)賤民・貧民研究の3つの系統に整理することができる。

管見の範囲で、最も初期の四国遍路研究は、1909年(明治42)の原秀四郎「八十八ヶ所の研究に就て」である[原 1909]。掲載誌が真言系教団の雑誌であることから、(あ)の系統に属するものといえる。四国遍路の学術研究の開始を呼びかける原の論考は、翌号に掲載された無記名のコメントと併読すると、四国遍路研究の萌芽期における興味深い状況が理解できる。

(い)については、景浦直孝、西園寺源透ら伊予史談会の活躍がある。特に『伊豫史談』92号に掲載された西園寺の「四國靈場考」は重要である。

我伊予の民間に於ては、ヘンド、オヘンド、ヘンド札、ヘンド姿、グレヘンド、オゲヘンド、ヘンドの荷さがし、ヘンドの嫁入長持ないなどと云ふて、總てヘンドと發音してをり、ヘンロとは口称せぬ、試みに阿讚土三国の識者に質問したら、左の如き解答を得たのである。

琴平町の草薙金四郎氏の答、遍路はヘンドに御座候恐らく讃岐一円は共通に候はん。

徳島市飯田義資氏の答、当地にても遍路をヘンドと申候、概ねヘンロとは不申候、オヘンドサン、ヘンド宿、ヘンド道、ヘンド石、ヘンド坊主など、常に俗間の用語として聞く所に御座候。

高知市武市佐市郎氏の答、土佐にてはすべてヘンロとは不申候、ヘンドと申候。

右三氏の垂示と、我伊予の民間称呼とは全然一致して居る、依りて四国は同一にヘンドと称しておることは些の疑もない[西園寺1937:26] ※△や○による強調は原文にあるもの

彼らが議論を重ねた問題のひとつが「ヘンド」という語句の位置づけであった。ここで西園寺が確認しているように、四国では巡礼を意味する「遍路」を今日定着している「ヘンロ」ではなく、「ヘンド」と称することが一般的であった。この言葉のズレは、当時の研究者達の関心をひいた。ヘンドを遍路の方言と説明したり、古語と理解したりする論争が展開されていたのである。実はこの問題は、(う)の系統につながる重要な問題に触れるものであった。

戦前期の四国遍路研究には、四国遍路についての記述に「乞食」が読み込まれる傾向を指摘できる。(う)の賤民・貧民研究の系統では、特に喜田貞吉の存在感が大きい。

四国には有名なる八十八箇所の靈場があつて、之を巡拝する所謂巡礼なるものが諸国から入り込んでくる。彼等は体よく云へば法捨を受けつつ、体悪く云へば乞食をしつつ巡礼するので、土地では之をヘンドといふ。何時から書き始めたか知らぬが文字には之を遍路と書き…これもを口とド訛つたものだと云つて…[喜田 1913] ※○印による強調は原文にあるもの

喜田は先のヘンドに関する論争に参加する中で、巡礼と乞食の結びつきに注目した。ここから、巡礼と賤民・貧民問題を接続させた独自の論考を展開していくのである。

(3) 四国遍路研究の課題

以上から、四国遍路研究の今後の課題として考えられるものを4点提示したい。

第1に四国遍路の「考古学」的問題系というべきものである。四国遍路の起源や、聖数「八十八」の意味、空海と靈場との関係、中世文書に登場する「四国辺地」の内容などが含まれる。これらは、戦前期から問い合わせられているにも関わらず、定説が確立していない。全く新しい資料や分析の切り口の登場が切望される問題群である。

第2に戦前期の研究の積極的な活用である。戦前期の研究は、今日ではそれ自体が歴史民俗資料としての価値を持つ。これらを読み直すことで、四国遍路研究に新たな知見を加えることが期待できる。一例として、筆者は戦前期の議論から「ヘンド」に注目し、これが巡礼者を迎える四国人々の心性に関わる重要な概念であることを論じた[浅川 2008]。

第3に四国遍路と巡礼一般の接合に関わる問題群、特に一般理論の構築と比較巡礼研究である。1980年代以降、巡礼研究が多様化したことで、逆にこうした関心からは退行したように見える。近年の研究の蓄積を踏まえた上で、再び大きなテーマに挑戦することも求められよう。

第4に四国遍路のローカリティへの着目である。第3の課題とは逆の方向性になるが、両者は矛盾するものではない。例えば、四国遍路を特徴づけるものとして、多くの研究者が関心を寄せてきたものに「接待」がある。他にも徒步巡礼の現存など、四国遍路の特徴として語られるものは少なくない。こうしたテーマを掘り下げることは、巡礼研究の各論的な深まりに寄与するのみならず、巡礼研究という枠組みを超えて、観光や地域づくり、教育、健康・スポーツなどの幅広い社会領域に、新しい知見を提供しうる可能性を有するのではないだろうか。

IV 最近の巡礼研究の動向と特徴—宗教学、民俗学、文化人類学の領域から

ここまで巡礼・遍路研究の整理を踏まえた上で、宗教学、民俗学、文化人類学の領域における巡礼研究の最新の動向をまとめてみたい。日本宗教学会、日本民俗学会、日本文化人類学会、そして宗教学の関連学会である「宗教と社会」学会における最近3年間(2006-2008)の学術大会のプログラムから巡礼研究のリストを作成した(資料2)。ここからわかる最近の巡礼研究の動向と特徴は、次の4点にまとめられる。

(1) 奉引する宗教学的巡礼研究

第1に宗教学系の巡礼研究が非常に多いことである。日本民俗学会では15本、日本人類学会では9本なのに対し、日本宗教学会では35本と圧倒的に多い。学会規模の小さい「宗教と社会」学会でも12本の研究発表がある。近年の巡礼研究の隆盛は、宗教学が奉引していると言えよう。

(2) シンポジウム・共同研究発表の増加

第2にシンポジウムや共同発表のテーマに聖地や巡礼が取り上げられる傾向があることである。パネル発表「宗教とツーリズム—聖なるものの「現在」をめぐって」「聖地・慰靈・宗教的ナショナリズムの再構築」(2006年日本宗教学会)、テーマセッション「ツーリズム・聖地・巡礼」(2007年「宗教と社会」学会)のように、聖地や巡礼が直接的なテーマとされたもの以外にも、2006年日本宗教学会でのシンポジウム「死者と生者の接点」における宮家準と藤井正雄の発表や、2007年日本民俗学会でのシンポジウム「仏教と民俗」における小嶋博巳、2008年日本文化人類学会での「分科会:侵犯する身体・増殖する身体」における小牧幸代など、より大きな枠組みに巡礼研究が取り込まれる形がみられた³。

こうした傾向は、巡礼が研究者間であるいは学会全体として共有すべき問題として認識されだしたことを見せるものである。特にシンポジウムについては、その年の学会の学問的関心を象徴するものであり、そこに聖地や巡礼が取り入れられたことの意味は大きい。

(3) 若手研究者の参加と現地調査報告の充実

第3は若手研究者を中心とする継続的かつ丹念なフィールドワークに基づく研究が目立つことである。これまでにも寺戸淳子らの例があるが、近年では、特に大学院生や博士論文の執筆を控えた若手研究者による精力的な研究報告の積み重ねが目を引く。例えば、河西瑛里子(京都大学大学院)によるイギリスの女神信仰の聖地グラストンベリー、岡本亮輔(筑波大学大学院)によるフランスの超教派的聖地テゼ、デラコルダ・ティンカ(筑波大学大学院)によるボスニア・ヘルツェゴビナのマリア出現の聖地メジュゴリエ、小

林奈央子(名古屋大学大学院)による日本の修驗道の聖地である御嶽山などの研究である。

こうした若手研究者たちの積み重ねは、いずれ博士論文への帰結を目指したものであることが多い。近い将来、巡礼研究に大きな厚みが加わることを期待させるものとして、注目したい。

(4) 巡礼研究の新機軸の登場

第4は巡礼を分析する新しい切り口が登場していることである。特に本稿では、(A) ツーリズム／文化遺産系、(B) 慰霊／ナショナリズム系、(C) ポピュラー・カルチャー(アニメ)系、(D) 福祉／ボランティア系の4つの「軸」に注目したい。

(A) ツーリズム／文化遺産系

4つの新機軸の中でも、最も活発な領域である。山中弘、木村勝彦、松井圭介による長崎の教会群と世界遺産化をめぐる研究、浅川による四国遍路の遍路道再生運動の研究、門田岳久による沖縄の斎場御嶽研究などがある。対馬路人(2007年「宗教と社会」学会)や森栗茂一(2007年日本民俗学会)などの交通に関する発表もこのカテゴリーに入る。

こうしたツーリズム系の巡礼研究の隆盛は、「ビジット・ジャパン」キャンペーンなどの観光立国に向けた国家的な政策や、文化遺産・世界遺産ブームなどの社会的文脈と関連している。加えて、観光研究と巡礼研究の親和性の高さも指摘しておきたい。そもそもN. グレイバーンが観光を「聖なる旅」と捉えた[Graburn 1989(1977)]ように、観光研究、特に観光人類学は巡礼研究や儀礼研究の応用として登場した系譜を持つ。その意味では、観光研究と巡礼研究の再接合、もしくは観光研究の巡礼研究への「逆輸入」が進んでいるとも言えよう。

(B) 慰霊／ナショナリズム系

近年、宗教学などの分野では慰霊をめぐる議論が盛んである。ここから、戦争の激戦地や阪神・淡路大震災(1995年)、JR福知山線の脱線事故(2005年)などの惨事の現場が「聖地」とされ、その地に詣でて犠牲者の靈を慰める行為を「巡礼」とする事例に注目する研究が登場した。2006年の日本宗教学会でのパネル発表「聖地・慰霊・宗教的ナショナリズムの再構築」における加藤信行、栗津賢太、平良直、西村明の発表や、中山郁(2008年日本宗教学会)などである。

こうした議論は、戦争や災害といった負の記憶と体験によっても「聖地」が構築されるという興味深い視点を我々に示す。「巡礼者」はその「聖地」を「巡礼」することで負の記憶を想起し、共有し、追体験するのである。特に戦没者慰霊については、国民国家論やナショナリズム論といった大きな枠組みに関連するものであり、巡礼研究の発展領域として興味深い。

(C) ポピュラー・カルチャー(アニメ)系

第3には、ポピュラー・カルチャーと巡礼の接合に関する研究がある。これまでにも、I. リーダーが「世俗的巡礼」と包括する現象[リーダー 2005]—例えば、エルビス・プレスリーのファンがゆかりの地をめぐる「巡礼」行為—が報告されており、その系譜に連なるものと言えよう。特に注目されるのは、筑波学院生の今井信治(2007年「宗教と社会」学会他)や、金沢大学のデール・アンドリューズ(2008年日本宗教学会)などの、アニメとオタク文化に関するものである。彼ら思い入れのあるアニメや漫画などの舞台となった場所を「聖地」と呼び、そこを訪れる行為を「巡礼」と称する。2008年11月1日現在、インターネットの検索サイトGoogleで「聖地巡礼」を検索すると、トップに表示されるのは、

四国遍路や西国巡礼などの伝統的・宗教的な巡礼ではなく、アニメ・漫画系の「聖地巡礼」であることの大変興味深い。

これらは現代的あるいは擬似的な巡礼と言えよう。だが、こうした事例や研究は「きわもの」では決してない。むしろ、擬似的巡礼についての考察は、聖地や巡礼それ自体の意味を逆照射する。また現代的な現象であるために、ある場所がいかにして特別な場所「聖地」になりうるのかという、聖地創造のプロセスに重要な論点を提供する可能性も有するものである。

(D) 福祉／ボランティア系

第4は、福祉やボランティアの観点から巡礼を対象化するものである。板井正斎(2008年「宗教と社会」学会、2008年日本宗教学会)と、松村志眞秀(2008年日本宗教学会)の研究がある。

星野英紀が、巡礼の定義に「苦行」を盛り込んだ[星野 2001]ように、聖地や巡礼には聖なるものへのアクセスを困難にする構造が埋め込まれている。神社の拝殿はしばしば急な階段をもって、参拝者を見上げさせる構造を持っており、それによって聖なるものの価値を体現しているとも言える。こうした聖地独特の構造は社会福祉の文脈からは「障害」へと変化する。ここに聖性を体験させるしかけとアクセシビリティとの相克・葛藤という新たな問題系が浮上する。

現在はまだ、本格的な議論は少ないが、近年の医療福祉系大学の増加や、高齢化する日本社会などの要因から、今後、増加することが予想される領域である。

以上にあげた(A)～(D)はいずれも、従来の巡礼研究があまり取ってこなかった視点である。巡礼研究の新機軸と言ってよい。巡礼・遍路や聖地それ自体に、直接的な解明のメスを入れるよりは、むしろそれらを所与のものとし、巡礼の派生的あるいは境界的領域に光をあてる方向性が特徴である。あるいは、「巡礼」として表象される社会現象を分析するものと言えるかもしれない。

観光や慰霊、ポップカルチャー、ボランティアといった、一見して巡礼とはあまり関係がなさそうな領域において、巡礼が研究対象となる。こうした近年の動向は、従来の巡礼研究と学説史的な切断があるようにも思われる。また、これらの傾向は、「巡礼研究」という不確かな枠組みの再考を余儀なくさせる。巡礼や聖地を直接的に取り扱わない研究の増加は、巡礼研究という学問の後退や散逸を示すものなのだろうか。

筆者はむしろ巡礼研究の発展を促すものと考えている。近年、さまざまなメディアにおいて、巡礼・遍路や聖地という言葉を見かける機会が多くなった。讃岐うどんの食べ歩きを「うどん巡礼」「うどん遍路」などと称するサイトが例としてあげられよう⁴。これらは「食べ歩き」と称しても十分に意味は通じる。なぜそこに「巡礼」や「遍路」という言葉が選択されるのか。同じ疑問は、アニメや漫画の舞台を訪れる「聖地巡礼」にも言える。なぜ、その場所を聖地と称し、その行為を巡礼と称することが適切であると考えられ、受容されるのであろうか。

こうした傾向が、四国遍路に代表される伝統的巡礼の復権とほぼ同時期であったことが興味深い。確かにこれまでもある世界の中心的な場を表現するのに「○○のメッカ」という表現はあった。近年は、人々のこのような発想がさらに発展し、巡礼や聖地といった言葉と概念が、ある種の「市民権」を獲得するに至ったように思われる。巡礼・遍路研究は、こうした社会的な巡礼概念の広がりも研究の射程に組み込んでいくことで、より膨らみを増すことが期待できるのではないだろうか。

V 巡礼研究の今後の問題系

以上、大雑把であるが最近の巡礼・遍路研究の動向を整理してみた。最後に、巡礼研究の今後の問題系としてクローズアップされるものを、ひとまず3点提示してみたい。

第1に聖地創造論／再生論というべき問題系である。これはある場所が特別な意味を帯びた「聖地」となるということはどのようなことなのか、誰の手でいかなるプロセスで聖地は構築され改変されるのかという問い合わせる意味論的・過程論的な問題系である。先に挙げた4つの領域でも、ツーリズム、慰霊、ポップカルチャーなど、幅広い分野に係わるものと言えよう。

第2に巡礼体験論というべき問題系である。巡礼は体験者の人生にどのような影響を与えるのかという問い、特に生きがいや癒し、宗教体験などのキーワードに関係する。とりたてて新しい課題ではないが、巡礼の今日的な意義を追求するには、不可欠なテーマである。

第3に巡礼資源論というべき問題系である。これまでの人類の営みによって蓄積してきた「巡礼」は、どのような領域に応用・活用できるのかという問い合わせする発展的・応用的問題系である。ツーリズム研究におけるオーセンティシティの議論のように、時に、巡礼の真正さ／神聖さに関する議論を伴うことが予想される。

これまで、巡礼研究が最も活況を呈していたのは1970年代から1980年代にかけてであった。昨今の巡礼研究の動向は、既に数量的には当時に迫る勢いを持っているのではないだろうか。今後は、後世の研究に寄与しうる知見をどのくらい積み上げができるのかという、質的なものが問われよう。巡礼研究に従事するひとりとして、改めてその志を確認する次第である。

(註)

- 1 学際性が高く、ディシプリンも対象も多岐にわたる巡礼研究をレビューするにあたって、こうした絞り込みを行う理由は、ひとえに筆者の力不足ゆえであることをまずお断りしておきたい。また、本稿で取り扱う「巡礼研究」には、多くの場合、神仏や聖人などの聖なる事物に關係づけられた特別な場「聖地」と、そのような聖地をめぐる行為を幅広く射程化している。したがって、複数の聖地のセットをめぐる狭義の「巡礼」のみならず、通常「参詣」と呼ばれるような単一の聖地を訪れる行為や後述する「擬似的」な巡礼も含めている。
- 2 さらに最新の第67回学術大会(2008年9月)での研究発表を加えた。発表要旨は359号に掲載が予定されている。
- 3 このほか、説話・伝承学会の2008年春季大会は、シンポジウム「巡礼と説話・伝承—巡礼記と巡礼の民俗」が企画され、4本の研究発表が行われた他、公開講演会にも根井淨「原初的巡礼—隔夜参詣をめぐって」が発表されるなど、巡礼が中心に据えられた学術大会として印象に残るものだった。
- 4 Wakky氏「讃岐うどん巡礼」(http://www.geocities.jp/wakky_t_works_kobe/sanuki-top.htm)、四国新聞社「讃岐うどん遍路」(<http://www.shikoku-np.co.jp/udon/>)などが例としてあげられる。

【参考文献】

- 青木 保 1985 「現代巡礼論の試み—御嶽登拝を中心として」『境界の時間』 岩波書店
浅川 泰宏 2008 『巡礼の文化人類学的研究—四国遍路の接待文化』 古今書院
喜田 貞吉 1913 「四国へんど」『歴史地理』22巻1号 日本歴史地理学会 85-85
黒田 悅子 1988 『フィエスター中米の祭りと芸能』 平凡社
小池 長之 1959 「民衆の社寺参詣について」『佛教と民俗』第4号 仏教民俗学会 8-13
西園寺源透 1937 「四國靈場考」『伊豫史談』92号 伊予史談会 1-29
新城 常三 1982 『新稿 社寺参詣の社会経済史的研究』 執筆者
真野 俊和 1980 『旅の中の宗教』 NHK出版
関 一敏 1993 『聖母の出現—近代フォークカトリシズム考』 日本エディタースクール出版部
高橋 渉 1978 「〈札所〉巡詣の宗教的性格」『宮城学院女子大学研究論文集』第49号 1-25

- 1979 「「参詣」の形態と構造」『宗教研究』第241号 47-68
- 武田 明 1969 『巡礼の民俗』 岩崎美術社
- 寺戸 淳子 2006 『ルルド傷病者巡礼の世界』 知泉書館
- 原 秀四郎 1909 「八十八ヶ所の研究に就て（弘法大師と幼時）」『有声』32号 修養団 11-15
- 藤原久仁子 2004 『「聖女」信仰の成立と「語り」に関する人類学的研究』 すずさわ書房
- 星野 英紀 1981 『巡礼—聖と俗との現象学』 講談社
- 2001 『四国遍路の宗教学的研究』 法藏館
- 前田 卓 1971 『巡礼の社会学』 ミネルヴァ書房
- Graburn, Nelson H. H. 1989(1977) Tourism: The Sacred Journey, Smith, Valene L. eds Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism 2nd edition University of Pennsylvania Press
- リーダー, I. 2005 「現代世界における巡礼の興隆—その意味するもの」『現代宗教』2005 国際宗教研究所 279-305
- ターナー, V. 1981(1974) 『象徴と社会』 梶原景昭訳 紀伊國屋書店

資料1 『宗教研究』(第1号～第358号(第359号は見込み))における巡礼研究リスト

号	年	著者	タイトル	種類
123	1950	小池 長之	民間信仰の一形態としての巡礼	
127	1951	小池 長之	四国遍路をめぐる信仰	
137	1953	小池 長之	神幸と聖地	
176	1963	新城 常三	近世参詣の国民化—抜参りと御蔭詣で—	☆
186	1965	金子 圭助	幕末期の大和の寺社詣で	
190	1967	小池 長之	秩父巡礼	
214	1973	高橋 渉	〈おみろく参り〉について—宮城県弥勒寺調査中間報告—	
214	1973	星野 英紀	接待講における大師信仰の実態	
217	1974	星野 英紀	四国遍路における接待の意味—有田接待講の場合—	☆
218	1974	高橋 渉	「おみろく参り」について 2)—弥勒寺とイタコ信仰—	
218	1974	植田 重雄	ヨーロッパにおける巡礼について	
222	1975	高橋 渉	信仰の地域的形態とその性格—〈おみくろ参り〉について 3)—	
222	1975	植田 重雄	使徒聖ヤコブ巡礼の原像の考察—中世聖者伝承について—	
222	1975	星野 英紀	昭和10年代の四国遍路	
226	1976	高橋 渉	四国「弥谷」信仰について	
230	1976	高橋 渉	「札所」巡詣の宗教的性格について	
234	1977	高橋 渉	庶民信仰における〈行〉の形態と性格	
238	1979	星野 英紀	高群逸枝の巡礼体験について	
241	1979	高橋 渉	「参詣」の形態と構造	☆
242	1980	高橋 渉	「庶民信仰」の組織化について	
246	1981	高橋 渉	「六道参り」の信仰形態	
259	1984	日野西眞定	高野詣—特に院政期から鎌倉時代にかけて	
259	1984	関 一敏	ルルドの洞窟にみる祭祀空間の発生過程	
263	1985	中谷 弘光	巡礼—知多四国の場合—	
271	1987	小嶋 博巳	西国巡礼行者集団の伝承をめぐって	
271	1987	石倉 孝祐	熊野参詣における聖俗認識について	
275	1988	鎌田 東二	聖地のトポロジー—神国と浄土について—	
275	1988	山本 博子	円光大師二十五靈場巡拝記の一問題	
275	1988	中村 生雄	物詣と巡礼—その宗教意識の相違—	
283	1990	磯崎 定基	メッカ巡礼行事の現状—マレーシアタブンハッジ制度に関連して—	
287	1991	根井 浄	那智参詣曼荼羅にみえる補陀落度海僧	
287	1991	村上 興匡	都市生活者の参拝行動について—都市ターミナル空間における小祠祭祀—	
291	1992	河野 真	スロヴェニア(ユーゴ北部)におけるフランシスコ・ザヴィエル巡礼地とその現状	
295	1993	根井 浄	熊野那智参詣曼荼羅の制作者	
295	1993	山本 博子	法然上人靈跡巡拝記に関する一考察	
295	1993	杉井 純一	ポーランドにおける聖地巡礼—ヤスナ・グーラとカルバリア・ゼブジドフスカの事例から	
299	1994	平良 直	聖地と共同体	
299	1994	山本 博子	法然上人靈跡巡拝記に見られる諸問題	
299	1994	寺戸 淳子	聖地ルルドの構成原理—泉・聖体・聖女の拮抗—	
303	1995	石倉 孝祐	巡礼行動としての修学旅行	
306	1995	寺戸 淳子	聖地のスペクタクルルルドにおける奇蹟・聖体・傷病者—	
307	1996	稻福みき子	「首里十二カ所巡り」にみる宗教の重層構造	☆

307	1996	寺戸 淳子	ルルド巡礼の現在—「ルルド癌患者希望の会」同行調査を中心に—
311	1997	寺戸 淳子	ルルドにおける「奇蹟」と「治癒」
315	1998	寺戸 淳子	祭儀としての奉仕活動—ルルドの〈ホスピタリティー〉をめぐって—
319	1999	鳥羽 重宏	熊野詣の精進と還向の儀から—護法のことなど—
319	1999	根井 浄	原初的巡礼としての隔夜修行
319	1999	寺戸 淳子	苦しみの公共空間としてのルルド
319	1999	中山 和久	巡礼と癒し
322	2000	根井 浄	熊野古道の習い
327	2001	寺戸 淳子	知的障害児巡礼の挑戦—ルルドにおける共同体イメージの多様性
331	2002	寺戸 淳子	公共空間における「からだ」の主題化—ルルド巡礼分析—
331	2002	濱千代早由美	伊勢参宮習俗の現在
333	2002	松尾 剛次	四国遍路八十八札所の成立
335	2003	浅川 泰宏	遍路者接待における宗教性の位相
335	2003	藤原久仁子	巡礼の諸相
337	2003	寺戸 淳子	キリストに依る世界
339	2004	根井 浄	歓心十界曼荼羅と熊野比丘尼
339	2004	寺戸 淳子	ルルド巡礼における「公共性」の展開
339	2004	幡鎌 一弘	巡礼札から見る近世の西国巡礼
341	2004	吉田 京子	12イマーム・シーア派廟參詣の理論的側面
344	2005	青木 健	ゾロアスター教における聖地の概念
347	2006	山本 博子	法然上人二十五靈場のミニチュア靈場
347	2006	小林奈央子	岩崎御嶽山靈神場に見る御嶽講の現在
347	2006	望月 真澄	七面山「うつし靈場」について
347	2006	根井 浄	諸国定着の熊野比丘尼—備前国下笠加村の場合
351	2007	宮家 準	死者と生者の接点—民俗宗教の視点から
351	2007	藤井 正雄	死者と生者の接点—日本文化と仏教の聖地観
351	2007	山中 弘	宗教とツーリズムをめぐって
351	2007	森 悟朗	観光地としての江の島の展開
351	2007	浅川 泰宏	四国遍路の今日的展開—二極化する巡礼実践
351	2007	松井 圭介	観光戦略としての宗教—長崎におけるキリストンをめぐって
351	2007	木村 勝彦	長崎の教会群と世界遺産
351	2007	寺戸 淳子	公開空間への私事の「現れ」—「傷病者の塗油の秘跡」改革
351	2007	加藤 信行	戦犯の墓碑を支える人々—興亜観音・殉国七士の碑をめぐって
351	2007	栗津 賢太	戦地巡礼と記憶の再構成
351	2007	西村 明	戦争死者をめぐる無縁空間と権力空間
351	2007	平 良直	場所の記憶と中心性の再構築—沖縄意識の形成と観光という舞台
351	2007	今井 信治	ポピュラー・カルチャーにおける新しい共同体の構築
351	2007	望月 真澄	七面山「うつし靈場」の事例
351	2007	江島 尚俊	伝統仏教教団における聖地形成—明治期・知恩院を事例として
351	2007	山口 正博	聖地の近代—修驗靈山の表象
355	2008	河西瑛里子	グラストンベリーという聖地
355	2008	岩崎 真紀	聖家族の足跡を辿る人々—コプト・キリスト教にみる巡礼の諸相
355	2008	宮崎 智絵	宗教都市ヴァラナシにおける信仰
355	2008	望月 真澄	近世の身延山と江戸信徒
355	2008	デラコルダ・ティンカ	旧ユーゴスラビア崩壊後における宗教の復興と聖地への巡礼
355	2008	浅川 泰宏	歩き遍路における意識の変化と宗教的次元
355	2008	山中 弘	宗教的集合記憶のポリティクス—宗教とツーリズムの諸相

(以下は2008年度大会での発表されたもので、第359号に掲載見込みのもの)

359	2009	今井 信治	類似宗教と擬似宗教の定義をめぐって
359	2009	板井 正齊	聖地へのアクセシビリティ—宗教觀光地としての神社を事例に
359	2009	中山 郁	慰靈巡拝にみる靈魂觀念—東部ニューギニア地域の事例から
359	2009	西村 明	「隔たり」と「つなぎ」—戦地慰靈の時-空間的構成
359	2009	デラコルダ・ティンカ	聖地の構築—メジュゴリエを事例として
359	2009	岡本 亮輔	現代の聖地巡礼—ツーリズムにおける場所体験の複層性
359	2009	河西瑛里子	ヨーロッパの女神運動—イギリスとハンガリーの比較より
359	2009	松村志眞秀	宗教的空間構造の分析—神社の聖と俗
359	2009	河野 昌広	四国遍路における地域の活性化
359	2009	デール・アンドリューズ	「ひぐらしのなく頃に」聖地巡礼
359	2009	佐久間留理子	ネパールの仏教寺院ブンガ・バハの宗教的空间にみられる表象
359	2009	松岡 秀明	分析概念としての「宗教的空間」をめぐって

☆印は論文を、無印は学術大会発表要旨を示す。

資料2 宗教学・民俗学・人類学の学術大会における最近3年間の巡礼研究リスト

	年	発表者	タイトル	シンポジウム等
日本宗教学会	2006	宮家 準	死者と生者の接点—民俗宗教の視点から	シンポジウム「死者と生者の接点」
		藤井 正雄	死者と生者の接点—日本文化と仏教の聖地観	パネル：宗教とツーリズム—聖なるものの「現在」をめぐって
		山中 弘	宗教とツーリズムをめぐって	
		森 悟朗	観光地としての江の島の展開	
		浅川 泰宏	四国遍路の今日的展開—二極化する巡礼実践	
		松井 圭介	観光戦略としての宗教—長崎におけるキリスト教をめぐって	
		木村 勝彦	長崎の教会群と世界遺産	
		寺戸 淳子	公開空間への私事の「現れ」—「傷病者の塗油の秘跡」改革	パネル：公共空間と宗教の変容—フランスの事例を出発点に
		加藤 信行	戦犯の墓碑を支える人々—興亜観音・殉國七士の碑をめぐって	パネル：聖地・慰靈・宗教的ナショナリズムの再構築
		栗津 賢太	戦地巡礼と記憶の再構成	
		西村 明	戦争死者をめぐる無縁空間と権力空間	
		平 良直	場所の記憶と中心性の再構築—沖縄意識の形成と観光という舞台	
		今井 信治	ポピュラー・カルチャーにおける新しい共同体の構築	
		望月 真澄	七面山「うつし靈場」の事例	
		江島 尚俊	伝統佛教教団における聖地形成—明治期・知恩院を事例として	
		山口 正博	聖地の近代—修験靈山の表象	
日本民俗学会	2007	河西瑛里子	グラストンベリーという聖地	
		岩崎 真紀	聖家族の足跡を辿る人々—コプト・キリスト教にみる巡礼の諸相	
		宮崎 智絵	宗教都市ヴァラナシにおける信仰	
		望月 真澄	近世の身延山と江戸信徒	
		デラコルダ・ティンカ	旧ユーゴスラビア崩壊後における宗教の復興と聖地への巡礼	
		浅川 泰宏	歩き遍路における意識の変化と宗教的次元	
		山中 弘	宗教的集合記憶のポリティクス—宗教とツーリズムの諸相	
日本民俗学会	2008	今井 信治	類似宗教と擬似宗教の定義をめぐって	
		板井 正齊	聖地へのアクセシビリティ—宗教観光地としての神社を事例に	パネル：現代日本における地域活動と宗教文化の活用—神道と福祉の接点
		中山 郁	慰靈巡拝にみる靈魂観念—東部ニューギニア地域の事例から	パネル：現代日本の戦死者慰靈—慰靈の現場から見えるもの
		西村 明	「隔たり」と「つなぎ」—戦地慰靈の時・空間的構成	
		デラコルダ・ティンカ	聖地の構築—メジュゴリエを事例として	
		岡本 亮輔	現代の聖地巡礼—ツーリズムにおける場所体験の複層性	
		河西瑛里子	ヨーロッパの女神運動—イギリスとハンガリーの比較より	
		松村志眞秀	宗教的空间構造の分析—神社の聖と俗	
		河野 昌広	四国遍路における地域の活性化	
		デール・アンドリュース	「ひぐらしのなく頃に」聖地巡礼	
		佐久間留理子	ネパールの仏教寺院ブンガ・バハの宗教的空间にみられる表象	
		松岡 秀明	分析概念としての「宗教的空間」をめぐって	
日本民俗学会	2006	往西 美沙	大和郡山・番条のミニ大師靈場—町内で巡る八十八ヶ所	
		西村 敏也	三峰代参講の展開—ムラとマチの比較を通して	
		高木 大祐	青峯山正福寺の信仰—海民の寺社参拝をめぐって	
		福島 明子	納札で辿る明治～昭和初期の遍路の実態—内子町・小西屋に	
	2007	小嶋 博巳	めぐりの聖化—巡礼と仏教・民俗—	シンポジウム「仏教と民俗」
		山本 殖生	熊野牛玉宝印・櫛の靈験	分科会：熊野信仰文化の地方伝播
		根井 浄	熊野比丘尼の諸国定着と統制—熊野比丘尼文化の残燈	
		久野 俊彦	熊野信仰と「商人の巻物」	
		神田より子	熊野信仰の芸能への影響	

日本文化人類学会		由谷 裕哉	聖地の再創造と郷土史家 一親鸞の越後配流にまつわる旧蹟の生成	
		門田 岳久	信仰の「価値」—沖縄・斎場御嶽の文化遺産化をめぐる審美の基準とカテゴリー化	
		大谷めぐみ	出雲四十二浦巡礼考	
		田中久美子	新四国巡礼における札所の位置—佐賀県唐津市の大巡りの札所の意識と寺院との関係	
		森栗 茂一	公共交通を活かした四国遍路について	
	2008	上根 英之	伊勢神宮渡始式の構造と変遷	
	2006	菊田 悠	ウズベキスタンのピール崇敬—「イスラーム聖者信仰の近代化」に寄せて	
	2007	外川 昌彦	バングラデシュのある聖者廟における開発と人類学	
		小西 公大	女神信仰と社会空間—インド北西部タール砂漠における女神の神話と聖地をめぐって	
		藤原久仁子	聖なるモノのある「場所」—願掛け NaghmelWeghda と感謝巡礼 Pellegrinagg/Zjara ta' Ringrazzjament の調査から	
	2008	河西瑛里子	スピリチュアルな日常を生きる—英国グラストンベリーのヒーリング実践と女神運動を事例に	
		河西瑛里子	「ペイガニズム」という伝統—英国グラストンベリーの人々との交流から見えてくるもの	
		小牧 幸代	拡散するイスラームの聖遺物と聖地	分科会:侵犯する身体・増殖する身体
	「宗教と社会」学会	松波 康男	人と精霊をとりなす—エチオピア・聖地ファラカサでの治療儀礼	
		今井 信治	表象される聖地—オタクと聖地巡礼	テーマセッション:ツーリズム・聖地・巡礼
		山中 弘	「場所」の聖化とツーリズム—長崎カトリック教会群の世界遺産化を事例として	
		浅川 泰宏	創出される表象空間—遍路道再生運動の事例から	
		寺戸 淳子	「異邦」の魅力	
		真鍋 祐子	中国観光に投影されたナショナル・アイデンティティ—韓国人による「聖地」への帰郷	
		対馬 路人	コーディネートの力—世俗的(非宗派的)宗教コーディネーターの台頭と現代日本の宗教変動	
	2008	河西瑛里子	日々をスピリチュアルに生きる—英国の聖地、グラストンベリーにおけるヒーリングの実践と女神運動を事例として	
		岡本 亮輔	聖地の零度—フランス・テゼ共同体の事例を中心に	
		デラコルダ・ティンカ	ボスニア・ヘルツェゴビナの聖母出現地巡礼とツーリズム	
		河西瑛里子	スピリチュアリティ運動の聖地—グラストンベリー女神運動を事例に	
		板井 正齊	聖地への現代的アクセシビリティに関する研究—伊勢神宮参拝における観光ボランティアガイドの意識調査から	
	(説話・伝承学会)	外川 昌彦	バングラデシュの聖者廟における宗教と開発—戦略的本質主義としての宗教言説	
		恋田 知子	記述される巡礼—西国・熊野の諸相から	シンポジウム<巡礼と説話・伝承—巡礼記と巡礼の民俗>
		浅川 泰宏	ポテンシャルとしての弘法大師—現代遍路の巡礼物語	
		大穂 哲也	ムスリムの参詣案内記・巡礼記から	
		小嶋 博巳	縁起と巡礼—頼朝転生譚と六部たち	
		根井 浄	原初的巡礼—隔夜参詣をめぐって	公開講演会

(以上)